天ヶ瀬ダムの観光資源化と地域活性化について

横山　純一[1]・福本　賢[2]

[1]淀川ダム統合管理事務所　管理課　　（〒573-0166大阪府枚方市山田池北町10-1）

[2]淀川ダム統合管理事務所　防災情報課　　（〒573-0166大阪府枚方市山田池北町10-1）.

淀川ダム統合管理事務所では、平成２８年８月にプロジェクションマッピングを実施し、天ヶ瀬ダムが観光資源として活用できることを認識した。観光資源化により観光地域の一翼を担い、地域活性化に寄与することができるものと考える。本稿は、「天ヶ瀬ダムが地域活性のためにできること」を観光面において実現した取り組みや、今後の展望について紹介を行うものである。

キーワード　天ヶ瀬ダム、既存インフラ活用、観光資源化、地域活性化

1. はじめに

(1) 天ヶ瀬ダムの環境条件

天ヶ瀬ダムは、洪水調節、水力発電および京都府への水道用水供給を目的として１９６４年に完成したアーチ式ダムである。

図－１　天ヶ瀬ダム位置図

天ヶ瀬ダムは、京都府宇治市に位置し、宇治市街に近い都市型のダムである（図－１）。ダムより約２ｋｍ下流は、世界遺産に登録されている平等院鳳凰堂や宇治上神社など数多くの名所や史跡が点在する観光地である。（図－２）。JR、私鉄、バス、自動車によるアクセスが可能であり、その先にある天ヶ瀬ダムへのアクセス性は他のダムに比べて高い。年間観光入込客数は宇治市統計によると年間約５５０万人（平成２８年）である。

(2) 天ヶ瀬ダムの観光資源化

建設当時、天ヶ瀬ダムは観光を目的としたダムでは無かったが、巨大なコンクリート構造物の迫力や、放流という従来の観光資源には無い要素を備え持ち、当初の目的には無い「観光」に活用できるものとして見直されるようになった。

図－２　天ヶ瀬ダム周辺図

ダムは、インフラツーリズムとして人気があり、国土交通省では、ダムツーリズムと称してダムとその周辺地域の環境を活用し、地域と連携してダムの観光資源としての活用を図っている。天ヶ瀬ダムは前述のとおり観光面で好条件な場所に存在する。宇治市観光動向調査（平成２８年８月、宇治市）において、５％の方が「天ヶ瀬ダムに訪れたい」という結果からも、観光資源としてのポテンシャルを有していると言える。

さらに、天ヶ瀬ダムを観光資源として活用するだけでなく、観光面で地域全体としての一翼を担い、地域活性化へ繋げることが期待されている。

2. プロジェクションマッピングの実施

天ヶ瀬ダムでは、平成２８年８月にプロジェクションマッピングを社会実験として取り組んだ。これは、近畿地方整備局職員の発案である「夢１００」の中で出された夢の実現として行ったものである。

プロジェクションマッピング自体は概ね好評であったものの、今後の天ヶ瀬ダムのあり方について課題を残す結果となった。表－１は、プロジェクションマッピンク時に収集したアンケート「観光地としての価値を高めるために何が必要か」の回答を集計したものである。ダム観光放流、ダム見学等のイベントを求める意見や、展望台やイルミネーション、駐車場等の施設の改善を求める意見が上位である。

このような意見を受け、「天ヶ瀬ダムを観光資源として活用」できる可能性を改めて検討することとした。

観光地としての価値を高めるために何が必要か	人
ダム観光放流	346
展望台	321
イルミネーション	321
ダム見学	317
駐車場	275
プロジェクションマッピング	213
ピクニック広場	187
遊覧船	174
野外音楽堂	148
アスレチック	142
朝市・産地直売所	114
天ヶ瀬ダム資料館	93
その他	44

表－１　アンケート結果

（観光地としての価値を高めるために何が必要か）

3. 観光資源化の取り組み

天ヶ瀬ダムを観光資源として活用するための活動を紹介する。(1) ダム観光放流を見学したいという声に応えるために、点検放流に合わせたダム見学のイベント活動を実施した。(2) 天ヶ瀬ダムの存在をPRする手段が無かったことを改め、観光客が気軽に手にできる１枚物のフライヤーの配布を開始した。(3) SNSへの写真投稿によるダムのPRを期待して、イベント時に「写真フレーム」の貸し出しを開始した。(4) 近年増加する外国人観光客に対して、ダムからの放流を伝える放流警報の外国語放送の開始した。

(1) 点検放流

ダムにおける最大の魅力の１つとして、巨大な構造物からの放流が挙げられる。１秒間に数百トンの水を放流する様子は大迫力で、人気がある。プロジェクションマッピングにおけるアンケートにおいても、観光放流を望む声が最も多く寄せられているが、常に実施できるものではなく、その実現方法が課題であった。そこで、ダム見学のイベントに合わせた点検放流を実施し、イベント参加者には放流を間近で見学して頂いた。点検放流であれば、普段の操作規則上の放流とは別に、ゲート点検のタイミングで放流することができる。

平成２９年６月、宇治市観光協会主催のハイキングイベントのコースにダム見学が予定されていたので、イベントに合わせて点検放流を実施した。イベント参加者を右岸減勢工まで案内し、コンジットゲートに近づいたタイミングで点検放流を実施した（写真－２）。参加者の反応は非常に良く、約８割の方が「大変良い」又は「良い」というアンケート回答であり、今後も継続して実施することを後押しする結果となった。

写真－２　コンジットゲート点検放流

また、クレストゲートの点検放流を観光放流として活用する検討を進めている。クレストゲートは、別名「非常用洪水吐きゲート」と呼ばれ、非常時のみに使用されるゲートである。大規模洪水時を除き、通常運用で使われることがほぼ無いため、クレストゲートからの放流に希少価値を付加することができる。放流の情景も美しく、観光への活用が期待される。

平成２８年１１月および平成３０年３月に、イベント化に向けた試行的な取り組みとして、地元関係者を招き、クレストゲートからの点検放流を実施した。放流の様子

は、写真－３～５の通りである。写真－３は、ダム下流にある白虹橋から撮影した風景である。紅葉の山々を背景に、水糸を垂らしたような放流は、地元各社から取材・報道が行われた。写真－４、５は、ダム管理用通路であるキャットウォークより撮影した写真である。ドーム型アーチダムの丸い形状であるため、ゲート真下のキャットウォークより放流を裏側から観察することができる。

写真－３　クレスト点検放流（撮影場所：白虹橋）

写真－４　クレスト点検放流（撮影場所：キャットウォーク）（１）

写真－５　クレスト点検放流（撮影場所：キャットウォーク）（２）

(2) フライヤー作成

京阪宇治駅やJR宇治駅、平等院等が連なる観光街では、観光協会や観光案内所があり、そこでは、パンフレットの配布が行われている。しかし、その中には、天ヶ瀬ダムを紹介するものが無く、広報活動不足であることを痛感した。そのため、天ヶ瀬ダムの存在をPRすることを目的に、「宇治のもう一つの観光名所天ヶ瀬ダムへ行こう！」のフライヤーを作成した（写真－６）。フライヤーは、淀川ダム統合管理事務所の女性職員が中心となって作成した。「誰でも気軽に手にとってもらえるように」と考え、１枚物の簡単な構成としている。天ヶ瀬ダムを知らない人が初めてフライヤーを見たとしても理解しやすいよう、表現を簡素化して、ダムの紹介や、天ヶ瀬ダムまでの行き方を描いた地図等が記載されている。また、手にした方が親しみを持てるよう、地図や文字は全て手書きで作成するという工夫を取り入れた。

写真－６　フライヤー「宇治のもう一つの観光名所天ヶ瀬ダムへ行こう！」

フライヤーの設置は平成２９年１１月より開始し、平等院周辺の観光街（宇治市観光センター）や、京阪宇治駅、JR宇治駅、市内の大学等にて配布している。

配布状況は好調で、初版６００部を用意したが約１ヶ月で配布が終了した。その後も継続して配布を続け、平成３０年５月現在で累計約２０００部を配布し、一定のPR効果があると判断する。

手にした方の反応も良く、「可愛らしい感じで人間味がある」、「親しみがある」、「違うバージョンも見てみたい」などの声を聞いている。

フライヤーを観光客が多数訪れる場所に設置すること

により、外部の人に対するPRとなっていることはもちろん、天ヶ瀬ダムに携わる仕事をしている職員の天ヶ瀬ダムに対する親しみが深くなり、「周囲の人に天ヶ瀬ダムを知ってもらいたい」という意識が生まれ、内部からのPR効果も生じる結果となっている。

また、宇治市観光センターにはディスプレイスライドが設置されており、観光センターを訪れる多数の人の目に触れている。宇治市観光協会の協力により、ディスプレイスライドへの表示を行うこととした（写真－７）。

写真－７　宇治市観光協会におけるディスプレイ表示

(3) 写真フレーム

天ヶ瀬ダムを訪れた方に、SNSで写真投稿をしてもらうことを目的として、写真フレームを作成した（写真－８）。インスタグラムやダムカードの様式をもとに、写真箇所を切りぬいたデザインである。費用を抑え手間をかけずに作成できること、写真フレームを用いた撮影が近年流行していることから、作成に至った。これも、淀川ダム統合管理事務所の女性職員が中心となって作成した。

現在は、イベント時に貸し出しを行っている。反応は良く、多くの方に利用して頂いている。「写真フレームはついつい使ってしまうアイテム」、「楽しい」、「上手に撮影した人の見本があれば真似て撮影したい」などの声を頂いた。インスタグラムやツイッターなどのSNSへの投稿も確認できている。

SNSは気軽に投稿できるため、投稿者の正直な気持ちが表れやすい。天ヶ瀬ダムの存在が拡散されるだけでなく、訪れた人の正直な感想が投稿されることで、認知度の上昇や、「訪れてみたい」と思う気持ちを広げるきっかけとなることを期待している。

写真－８　写真フレーム

(4) 放流警報の外国語放送

ダムからの放流に先立ち、あらかじめ河川区域内やその周辺の河川利用者等に危害が及ばないよう、危険性の周知と注意喚起のために放流警報を実施している（写真－９）。天ヶ瀬ダムにおいても同様であるが、放流警報を放送する区間には観光地が含まれており、多数の観光客が訪れている。近年、宇治市街地には、外国人観光客が特に増加しており、その方々にも伝わる内容の放送が必要であった。外国人観光客に対して放流警報の放送内容を適切に伝えるため、宇治市街地が放流警報の放送エリアに含まれる放流警報局２ヶ所において、日本語、英語、中国語および韓国語の４ヶ国語による放流警報を平成３０年４月１日より開始することとした。この試みは全国初であり、観光地に近いダムならではの取り組みであると言える。言語の選定方法は、宇治市観光動向調査の結果に基づき、宇治市を訪れる外国人の言語圏上位３カ国語とした。

開始後、数回の放流警報を実施している。放流警報を聞いている外国人にヒアリングを行う等により、外国人にとってもより理解しやすい放流警報が行えるよう、改良を進めていく必要がある。

写真－９　放流警報局

このような活動は全て淀川ダム統合管理事務所で実施

したものであるが、地元の協力が無ければ実現できなかったものばかりである。

当該観光地はすでに地元による「観光地域づくり」が行われているところであるが、天ヶ瀬ダムを含めることにより、観光地域に新たな魅力が生まれることとなり、観光地のさらなる活性化が期待できると考えるが、官民が連携して「天ヶ瀬ダムを含む観光地域づくり」を行うにあたっては、多様な関係者の合意形成（地域と連携した取り組み）が必要であった。

4. 地域と連携した取り組み

合意形成の場である検討会を設置し、今後の方針を決定し、地域が主体的に実施している取り組み事例を紹介する。

(1) 検討会の設置

平成２９年８月に「天ヶ瀬ダムを観光資源に含めた宇治市地域の観光発展検討会」を発足した。平成３０年５月現在の検討会メンバーは、国、宇治市、京都府、DMO、京阪HD(株)である。

目的は、天ヶ瀬ダムが宇治市域の観光振興に役立てるよう、構想・アイディアを出し合い、今後の全体計画について合意形成を図っていくことである。その中で、ソフト（イベント等を官民が協力して実施できる仕組み作り）・ハード（天ヶ瀬ダム観光資源化に向けた周辺環境の整備）の両面での検討を行っている。

(2) アクションプランの策定

宇治市では観光振興計画（１０年分）の後期（残り５年）アクションプランの検討を行い、平成３０年３月末に、平成３０年度～３４年度の計画を策定した。その中では地域を活かした観光プランとして、初めて天ヶ瀬ダムの活用が明記された。　そのプランの検証として実証実験的に、以下(3) および (4) の２つの取り組みが行われた。(3) においては、淀川ダム統合管理事務所も協力している。

(3) 天ヶ瀬ダムを見に行こう！

お茶の京都DMOが主催で、天ヶ瀬ダムを案内するツアー、「天ヶ瀬ダムを見に行こう！」を平成３０年５月に実施に至った。同時開催で、宇治市の平等院や萬福寺等を巡るツアーを開催し、天ヶ瀬ダムを含めた周遊観光のプランを実証実験的に行った。各観光地への移動は、無料シャトルバスによる送迎があり、簡単にダムと周りの観光地を往来できる工夫がされている。ツアー参加者（定員制、４０名×４日の計１６０名）を募ったところ、募集開始からわずか２日間で満員となる盛況ぶりであった。

天ヶ瀬ダムの見学者には、事業概要説明（写真－１０）、キャットウォークの案内、放流見学を行った。参加者からの評判もよく、「普段入ることができないキャットウォークに入れて良かった」、「放流中で大迫力で感動した」、「ダム送迎バスがあって親切」、「このイベントを今後も続けるべき、友人を連れて行きたい」など、ツアーに対する満足感だけでなく、今後に繋がる回答を得る結果となった。

写真－１０　事業概要説明の様子

(4) 舟運事業

Eボートで宇治川を下る観光ツアー「宇治川Eボート体験と宇治町あるき」が平成３０年５月に実施された。地元観光ガイドによる町歩きとEボート体験をからめた周遊イベントである。Eボート体験の出発地点が、天ヶ瀬ダムの全景が一望できるポイント、ダム下流直下の白虹橋付近となっており、ダムの見物も合わせて、舟運体験が行われた。

このような実証実験的なイベント活動は、今後も継続し、軌道に乗せる必要があるが、現在のところ道半ばと言える。取り組みにより得られたデータの継続的なデー

タ収集分析、データに基づく明確なコンセプトに基づいた戦略・PCDAサイクルの確立が必要であり、そのためには地域が主体的となって進める仕組みが必要である。

5. まとめ

（１）今後の展望

今後の展望であるが、「地域と連携した取り組み」の１つとして、右岸減勢工における視点場の設置を考えているところである。右岸減勢工から眺める放流の情景は臨場感があり、実証実験においても高い人気があることが確認できている。しかし、その場所へのアクセス方法は、管理用通路キャットウォークに限られており、現状は、イベント時にしか案内できていない。そこで、いつでも、誰でも、簡単にアクセスできるよう、ダム下流側に右岸減勢工までの散歩道の整備や休憩場の設置を行うことが効果的であると考える。プロジェクションマッピンク時のアンケート結果（表－１）では、ダムを見ながらゆっくりと休憩できるような展望台が欲しいとの声が上位に上がっており、散歩道に合わせてた設置を計画する価値は十分にあると言える。

写真－１１　右岸減勢工までの散歩道整備（案）

他にも、ダムまでのサイン計画として、放流警報表示板を、ダムまでの案内版として活用する案もある。現状、ダムからの放流を行っていない平常時は非表示であるため、「ダムまであと○km」といった案内表示することで活用する案である。ダムまでの道がわかりづらい、という意見に対して応えるための案で、お金をかけずに、現状ある設備の使い方を工夫するだけで実施できるというメリットが考えられる。

（２）観光資源化と地域活性化に向けて

現状、民間と協力しながら、実証実験的な取り組みをいくつか行い、良い反響を得られる結果となった。今後も PDCA サイクルを実施していき、よりブラッシュアップし続けることで、天ヶ瀬ダムを人気の観光名所の一つにすることができるであろう。一方で、民主体となって動く仕組み作りが必要であるが、そこまでは至っていない。国・自治体としては、知恵・ノウハウを惜しまず地元に提供し、「きっかけ作り」を行い、地元が主体となって、考え、分析し、行動する仕組みが必要である。現状は、国・自治体が観光地域づくりを行う舵取り役となって事業を進めているが、今後としては、地域や民間が主体となって取り組む必要があり、バトンを渡せるようにしていく必要がある。そして、将来的には、民主導で、イベントやツアー等を実施することが当然となり、天ヶ瀬ダムが宇治の定番の観光名所へと発展していくことを期待している。